

Title	『後水尾院和漢千句』における固有名詞の特徴について : 和漢聯句と和漢俳諧との比較					
Author(s)	山田, 理恵					
Citation	語文. 2004, 83, p. 1-11					
Version Type	VoR					
URL	https://hdl.handle.net/11094/69042					
rights						
Note						

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『後水尾院和漢千句』における固有名詞の特徴について

――和漢聯句と和漢俳諧との比較―

山田

理

恵

千句」の呼称で示す)として伝わっている。目録』の記載による。以下、『後水尾院和漢千句』あるいは「本は、現在『寛永十三年八月十五日於仙洞御会漢和聯句』(『国書総後水尾院は、仙洞において和漢聯句の千句を興行した。この千句寛永十三(一六三六)年五月十三日から十五日までの三日間、

章の日録『隔蓂記』から指摘されている。

『後水尾院和漢千句』興行の意義については、田中隆裕氏によ『後水尾院和漢千句』興行の意義については、田中隆裕氏により、正親町、後陽成、後水尾の三代にわたる帝によって興行された和漢千句であること、儲君(後の後光明帝)の四歳の祝言を込た和漢千句であること、儲君(後の後光明帝)の四歳の祝言を込た和漢千句』興行の意義については、田中隆裕氏によ

田中氏が指摘されるように、禁裏・仙洞での和漢聯句千句の興

備の一つと考えられよう。

興味と自信を深めた結果ゆえに成立した和漢千句であり、その興このように『後水尾院和漢千句』は、後水尾院の和漢聯句への

品として、詳細に検討する必要があるといえよう。和漢千句』を、後水尾院を中心とした堂上連歌壇の粋を集めた作ての詳細な研究は十分になされているとは言えない。『後水尾院漢千句興行の意義についての考察がある一方、千句の内容についいる通りである。しかし、このような後水尾院の立場から見た和行の意義や入念に準備された千句であることは田中氏が指摘して

一、和漢聯句と典拠漢籍

和漢聯句は、漢句と和句を連ねる文芸である。同じく漢句と和和漢聯句は、漢句に與漢を典拠として用いることが不可欠である点にある。一方の和句には「付合の方法における発想の方法が、本稿では、連歌的世界を踏み越えてはならないのである」と深沢真二ては、連歌的世界を踏み越えてはならないのである」と深沢真二たと考えられる。但し、それでいて和句一句としての表現においたが、連歌的世界を踏み越えてはならないのである」と深沢真二たが、本稿では、連歌的世界を踏み越えてはならないのである」と深沢真二たが、本稿では、漢句と和句に関する美的世界に発いる点に、連立の特徴を更に明瞭にするために和漢聯句の大きく異なる点は、句を用いる文芸に和漢俳諧が存するが、両者の大きく異なる点は、句を用いる文芸に和漢俳諧が存するが、両者の大きく異なる点は、句を用いる文芸に和漢俳諧が存するが、両者の大きく異なる点は、句を開いる文芸に記述されて

ても考察があるが、漢句の内容、詠まれた漢籍典拠などについて手がかりとしてなされており、後者の和句と漢句との違いについ

は検討がなされていない。

山僧であり、土御門泰重は、公家(陰陽家)である。泰重につい承章、九岩中達、俊甫光勝、雪岑梵崟の五人は博覧強記を競う五『後水尾院和漢千句』の漢句作者七人のうち、昕叔顕晫、鳳林

ては、田中氏によって

学の御相手なのであろう。 点取両吟漢和等を元和四~六年に数回試み、(中略)彼は勉点取両吟漢和等を元和四~六年に数回試み、(中略)彼は勉で、漢句を得意とした可成の自信家でもある。後水尾も彼と泰重は後陽成が元和元年に度々興行した点取四吟聯句の連衆

ためには、詠み込まれた固有名詞がそのきっかけの一つとなったいく必要があった。漢句の内容・用いられた典拠漢籍を理解する後水尾院や泰重、五山僧ほどには漢籍に精通していなかったと思われる。一方、和句の連衆である近衛信尋、阿野實顕、滋たと思われる。一方、和句の連衆である近衛信尋、阿野實顕、滋たと思われる。一方、和句の連衆である近衛信尋、阿野實顕、滋たと思われる。一方、和句の連衆である近衛信尋、阿野實顕、滋たと思れるが、失行する漢句の意味を理解し、咀嚼していなかったと思われるが、先行する漢句の意味を理解し、咀嚼していなかったと思いる。

着目し、整理してその特徴を示す。そしてその特徴について検討、そこで、まず『後水尾院和漢千句』に詠み込まれた固有名詞に

と考える。

押韻に用いられる韻字による和漢聯句と和漢俳諧の比較が韻書を

和漢聯句と和漢俳諧との比較に関しては、深沢眞二氏により、

の違いを明らかにしたい。こうした作業によって、和漢聯句の持 するために、漢句と和句に用いられる固有名詞を比較して、両者 つ、文芸的特徴が見いだされるのではないかと考える。

試み、和漢聯句の具体的特徴について更なる考察を加えたい。 られる固有名詞の特徴と、和漢俳諧に用いられるそれとの比較を 次いで、和漢聯句と和漢俳諧の素材の比較として、そこに用い

二、『後水尾院和漢千句』の漢句に詠まれた固有名詞の根拠

詞に顕著な違いがみられる。 に一覧表にすると、稿末の【表一】のようになる。 『後水尾院和漢千句』に詠み込まれた固有名詞を漢句・和句別 一見して明らかなように、和句と漢句では詠み込まれる固有名 人名と地名に注目していくつか取り

て、084 句がある。 漢句に人名(太真夫人)と地名(馬嵬坡)を詠み込んだ例とし 上げてみたい。

083 そねみおふうき身のすくせなげかれて 前関白

)84 棄土馬嵬真(棄てゝ土 馬嵬の真)

下泥土中、不見玉顔空死処」(馬嵬坡下 泥土の中、玉顔を見ず 084 句は、白居易「長恨歌」(『古文真宝前集』巻八)の「馬嵬坡

其の中 綽約として 仙子多し。中に一人有り 字は太真、雪膚 空しく死せし処)と、「樓閣玲瓏五雲起、其中綽約多仙子。中有 一人字太真、雪膚花貌參差是」(樓閣 玲瓏として 五雲起ち、 参差として是なり)を典拠とする句である。「真」という

> を玄宗皇帝と楊貴妃の恋に転じている。二句の意味は、「人々に 嫉妬されるという運命をなげくこの憂身であることよと、太真夫 人名と「馬嵬」という地名を詠み込み、 前の和句の漠然とした恋

人は、馬嵬坡で棄てられ土となった」となる。 この例のように、漢句で固有名詞を用いることで、 前後の

の世界を具体化し、限定するという趣向が、和漢聯句の特徴の一 つであり面白さであったと思われる。

だ例に 013 句がある。 同じ様に、漢句に人名(菅原道真)と地名 (径山) を詠み込ん

013 温問菅参径(温問 菅 径に参す)

012 手折てかへる梅の

枝

高倉三

位

小袋日。我参無準受衣云々」(某夢む。天神 013 句は、中世に流布した渡唐天神説話をふまえた句であり、具 て径山の無準師範に参禅して教えを請い、一枝の梅を手折って てはまるか。二句の意味は、「渡唐天神(菅原道真)は、渡宋し 肘に小袋を懸けて曰く、我 体的な典拠は『菅神入宋授衣記』の「某夢。天神袖挿梅花。肘懸 無準に参じ衣を受く云々、と)があ 袖に梅花を挿し、

世界を形作る例は、千句全体でもさすがにこの二例のみであるが、 上記のような、人名と地名を同時に詠み込み、極めて限定した

帰った」となる。

漢字一文字で人名を詠み込む例は多く見られる。 027 氷とくる波にたかべやうかぶらん

028 縦如范掣身(如ことを縦にして

范 身を掣く) 高倉

3

いる、そこへ范蠡は(越王の許から)身を引いて船出した」とな味は、「氷の解けた(春になった五湖の)波には小ガモが浮んで拠としており、范蠡を「范」の漢字一文字で詠み込む。二句の意其の私の徒属乗舟浮海以行、終不反」(乃ち其の軽宝珠玉を装ひ、家、同・貨殖列伝、『漢書』范蠡伝等)の「…乃装其軽宝珠玉、家、同・貨産列伝、『漢書』范蠡伝等)の「…乃装其軽宝珠玉、家、同・貨産列伝、『漢書』范蠡泛湖」の故事(『史記』越世

る。

漢句とは対照的に、和句では人名を詠み込んだ例は千句中に漢故事の中の人物が利用されているためであると考えられる。物(陶淵明、杜甫など)、また詩話によって詩人のエピソードが詩人では、その人となりが詩とともによく知られ、愛好された人書や童蒙書である『蒙求』によって知られる人物(范蠡など)、書や童蒙書である『蒙求』によって知られる人物(范蠡など)、書や童蒙書である『蒙求』によって知られる人物(范蠡など)、書や童蒙書である『蒙求』によって知られる人物(范蠡など)、書や童蒙書である『蒙求』によって知られる人物(范蠡など)、漢句に詠まれる固有名詞の多くは人名であるが、このように、漢句とは対照的に、和句では人名を詠み込んだ例は千句中に

「移りやすいことである、淵や瀬は私の涙で涙川となってしまっの登場人物、飛鳥井君を詠んだ恋の句である。二句の意味は、967 句は、966 句の涙川からの連想で導き出された『狭衣物語』967 飛鳥井のちぎりはかなくたえはてゝ 前関白

967 句(飛鳥井君)の一例のみである。

966 かはる渕瀬はたゞ涙川

高倉

悲しみによって」となる。た、(狭衣の)飛鳥井君の契が、はかなくも絶え果ててしまった

が詠まれることはあっても、地名のみが一句に詠み込まれること漢句が、「馬嵬坡」と「径山」のように、人名の補足として地名連歌における歌枕の伝統を継承するものであると思われ、一方の「北野天神」(神名)を除くと、地名に限られる。これは、和歌・和句に詠み込まれる固有名詞は、右の「飛鳥井君」、583 句の

を連ねているのである。る文芸の伝統を逸脱しないというルールが決められている中で句る文芸の伝統を逸脱しないというルールが決められている中で句では漢籍から取材した素材を詠み込むという、それぞれの承継す本千句では、和句は連歌の枠を出ずに本朝の素材を詠み、漢句

はないという特徴とは対照的である。

三、和漢聯句と和漢俳諧の典拠

和漢聯句と同じく和句と漢句を連ねるという形式をもつ和漢俳諧も、形式は同じながら後者は前者からは逸脱した対する和漢俳諧も、形式は同じながら後者は前者からは逸脱した対する卑俗滑稽、正統に対する異端・新奇なものとして、俳諧は大諧という文芸がある。連歌と俳諧の違いについて「和歌優美に対諧という文芸がある。連歌と俳諧の違いについて「和歌優美に対諸という文芸がある。

俳諧の固有名詞についても同様に、どのように用いられる傾向が前節まで和漢聯句において固有名詞を取り上げたように、和漢

あるのかを考察する。

諧を好んだことについては尾形仂、深沢眞二両氏の論考に詳しい。 貞門俳諧において和漢俳諧が盛行し、季吟・立圃らが特に和漢俳 あり、『後水尾院和漢千句』の連衆である鳳林承章は、野々口立 る。『後水尾院和漢千句』の興行とほぼ同時期、松永貞徳率いる 年刊、天理図書館綿屋文庫蔵)下巻所収の和漢漢和両吟百韻各二 貞門の俳人たちと和漢俳諧を巻いた漢句作者の多くは五山僧で 比較対照として扱うのは、北村季吟編『誹諧両吟集』(寛文四 (追加の和漢二句を含む)漢和歌仙両吟一巻の計四三八韻であ

漢句・和句に大差はなく、主として両句共に本朝の素材が詠み込 よう整理したものが、稿末の【表二】である。 この表で明らかなように、 和漢俳諧に用いられる固有名詞は、

らも、素材の上では、 ている。和漢俳諧は、 いずれにも唐土の地名は用いられず、本朝の地名のみが用いられ 用いられていたこととは対照的に、 み本朝の地名が詠み込まれており、漢句にわずかに唐土の地名が まれているという点に特徴がある。和漢聯句では、 漢句(五言)という唐土の形式を残しなが 紛れもない本朝の文芸として成立していた 和漢俳諧では、漢句・和句の 概ね和句にの

しかもそれは季吟・周令両吟和漢漢和四百韻の追加に、 和漢俳諧では唐土の詩人はわずか 7 「白楽 (天)」一例しかみえず、

401 吟じかはす蟬やからうた和歌

白楽汗顔行(白楽 顔に汗して行(にげはし)る)周 季吟

じかわしたところ、あの唐の白居易が顔に汗をかいて逃げ出すく とあるように、「外では蟬が鳴いている、我々は漢詩と和歌を吟 ことがあげられよう。次に「発句をも」の巻の 284 句と 290、 漢籍ではなく本朝の文学から取材した人名が多く用いられている 素材として唐土を意識して用いたとは言い難い。 あえて白楽天を引き合いに出したものであり、各百韻を巻く際に らいよいものが出来た」という、四百韻成就の矜持を示すために、 また、和漢聯句には見られない和漢俳諧の漢句の特徴として、

『俳諧塵塚』に収録されている。和漢聯句と和漢俳諧の漢句は共 圃と両吟漢和俳諧百韻を巻いており、その百韻は寛文十二年刊の

に五山僧によって作られている。

『俳諧両吟集』と、『後水尾院和漢千句』との比較が容易になる

291 句の例をあげる。 むざんやなのがれかたのゝ鷹の鳥 熊谷敦盛讐(熊谷は 敦盛の讐)

敦盛」を連想したことによる付合であろう。二句の意味は、「無(ミロ) 話を詠んだものであり、前句の「むざんやな」から御伽草子「小 284 句の熊谷・敦盛は『平家物語』巻九「敦盛最後」の、 笛の名手である十七才の敦盛を討ち取ってから出家の志を固めた 熊谷が

鳥のように敦盛を討った熊谷は、かたきである」となる。 惨であることよ、交野の鷹狩りからにげてきた鳥は。その無惨な

被迁鬼海嶌(迁さるるは鬼海が嶌)

ことが見て取れる。

和漢聯句の漢句で多く唐土の詩人が詠まれたこととは対照的に、

291 俊寛匕盖得(俊寛匕(ゆるす)こと盍(なん)ぞ得ざら

々

る。二句の意味は、「鬼海ヶ島に遷されたことを、あの俊寛はど 鬼海ヶ島に一人置き去りにされた俊寛僧都を詠み込んだものであ 291句の「俊寛」は同じく『平家物語』巻三「赦文」「足摺」の

うしてゆるすことができようか」となる。

えた例が見られる。 をも」の巻の 294、295 句のように、本朝の俚諺を漢句に置き換 からの人名が多く詠み込まれているが、和漢俳諧では次の「発句 また、和漢聯句の漢句では童蒙書『蒙求』にも見られる、 ・史書

下戸なれどしゆにまじわれば酔はすらし 勧雀囀蒙求(勧の雀は蒙求を囀る) (習はぬ経を読む萬(ハチ)) 同 周令

読不習経萬

味は、「下戸であっても、しゅ(酒・朱)に交われば酔ってしま 求』を囀る」という本朝の世話・俚諺を漢句にそのまま置き換え(18) 294句で『蒙求』という漢籍自体を用いて、「勧学院の雀は るという詠み方をしているのである。293句、294句の二句の意 『蒙

であろう。 うらしい、勧学院の雀は『蒙求』を囀る」となる。293句、294 ぬ経をよむ」をもじって漢句にしたものである。294、295 句の(E) 句は、和句から漢句への付句でありながら、本朝の俚諺という同 一の素材を用いて対句のように詠まれており、俳諧ゆえの遊び心 また、295 句は、 同じく本朝の俚諺 「寺のほとりの童はならは

> 二句の意味は、「勧学院の雀は『蒙求』を囀り、 のは、門前の小僧ではなく、蜂である」となる。「スズメバチ」(3) を念頭においた、雀から蜂への連想による付句である。 習わぬ経を読む

を整理すると、次のようになる。 このような和漢聯句と和漢俳諧の固有名詞の用いられ方の違い

一、和漢聯句の漢句では、唐土の人名、 して唐土の地名が主に詠まれる。 漢籍名、 人名の補足と

に詠まれる。 和漢俳諧の漢句では、本朝の地名、本朝の人名、 仏名が主

땓 Ξ 和漢俳諧の和句では、 和漢聯句の和句では、 本朝の地名、 本朝の地名、 本朝の人名が主に詠ま 神名が主に詠まれる。

詞を用いようとする傾向があり、それは唐土の固有名詞を用いる 似通っているといってよい。和漢俳諧の漢句では、 和漢聯句の漢句から離れようとする試みであると考えられる。 和漢俳諧の漢句(二)と、 和漢聯句の和句 =本朝の固有名 の特徴は大変

떽 和漢俳諧における固有名詞以外の素材

く漢句にも用いるという傾向が見られる。 目を転じてみたい。和漢俳諧には、本朝の素材を、 和句のみでな

和漢聯句と和漢俳諧を比較して、固有名詞以外の本朝の素材に

次の「洛花今織錦」巻に詠まれた 429、430 句 月やあらぬ春とはかはる後の彼岸 の例では、

430 我身一電光(我が身一つは 電光) 山石

想し、430句で「我が身一つは」と受けて、「電光のように夢い春やむかしの春ならぬ「わがみひとつはもとの身にして」)を連429句の「月やあらぬ」から『伊勢物語』(第四段「月やあらぬ

だものである。二句の意味は、「月は同じであっても、春の彼岸是観。」に見られるような釈教的無常感を一句のうちに詠み込ん経』の偈「一切有為法、如.|夢幻泡影、如.|露亦如.|電、応.|作.|如はし、430 句で「我が身一つは」と受けて、「電光のように儚い想し、430 句で「我が身一つは」と受けて、「電光のように儚い

材の用いられ方を、和漢聯句のそれと比較して整理すると、次のこのような、和漢俳諧に見られる(固有名詞を含む)本朝の素

うにあっという間に変化してしまった」となる。

と秋の彼岸では変ってしまったが、私自身はそれ以上に電光のよ

ようになる。 材の用いられ方を、和漢聯句のそれと比較して整理すると、次の

一、和漢聯句の漢句では、

漢籍から取材した典拠詩文を詠み込

二、和漢俳諧の漢句では、本朝の素材を詠み込む。

四、和漢俳諧の和句では、(俳諧連歌と同じく)漢語が詠まれ三、和漢聯句の和句では、本朝の素材を詠み込む。

これまで見てきたように、和漢俳諧では俚諺や和歌などの本朝て見られない和漢俳諧の特徴であると言えよう。の文学、俚諺をもじって漢句に用いることは、和漢聯句には決しつまり、固有名詞のみならず、本朝の素材である、和歌や本朝

取材した詩文を典拠として用い、和句が本朝の素材を用いるといした文芸であるといえよう。一方の和漢聯句の、漢句が漢籍からつまり、和漢俳諧は「和」と「漢」の境界線を、積極的に曖昧にていたことが、固有名詞以外の素材の用いられ方からも伺える。の文学の素材を漢句に詠み込むことが「俳諧」であると意識されの文学の素材を漢句に詠み込むことが「俳諧」であると意識され

明らかである。 成立したものであることが、和漢俳諧との比較によってより一層成立したものであることが、和漢俳諧との比較によってより一層た文芸であり、「和」と「漢」の境界線を侵さないことを固守し和漢聯句は、「和」と「漢」の境界線を侵さないことを固守し う原則を固守しようとする姿勢とは対照的である。

まとめ

まず、

和漢聯句である『後水尾院和漢千句』の特徴の一点目と

漢句が一文字で人名・地名を表現しようとすることに対し、和句補足として用いられているにすぎないことがあげられる。これは、特徴が見て取れるのである。二点目の特徴としては、和句には多という、それぞれが対立しながら一つの文芸として融合しているという、それぞれが対立しながら一つの文芸として融合しているという、それぞれが対立しながら一つの文芸として融合しているという、それぞれが対立しながら一つの文芸として融合しているという、それぞれが対立しながられるものであり、逆に和句して、人名、書名は漢句にのみ用いられるものであり、逆に和句して、人名、書名は漢句にのみ用いられるものであり、逆に和句

では地名(歌枕)の持つ「土地の実景の概念化、古歌や類歌に

によるものであろう。類型的な美意識と表現機能」を短い句形に利用しようとしたこと類型的な美意識と表現機能」を短い句形に利用しようとしたことの連想、事物の空間的な把握(涙川など)などから生み出された、よって形成された土地に対する印象や通念、土地の名辞の形から

深沢眞二氏は「寛永期の和漢俳諧」において、韻字における和漢解句と和漢俳諧の比較をされており、和漢聯句の和句と漢句は互いに、相手方の伝統に属する表現をとるでれて「和句と漢句は互いに、相手方の伝統に属する表現をとるの漢和聯句のほかの百韻について調べてみても、概してこのようの漢和聯句のほかの百韻について調べてみても、概してこのようの漢和聯句のによまれる素材(固有名詞を詠むことを固守していて「和句と漢句は互いに、相手方の伝統に属する表現をとることが明らかである。

いると言える」とされている。
し、漢句に連歌的な句も見られ、和句漢句の内容は殆ど同化してし、漢句に連歌的な句も見られ、和句漢句の内容は殆ど同化して味合いは見る影もなくなっている。俗言という共通の素材が充実詩文の伝統的表現から逃れ出て、伝統の対立という和漢聯句の意詩文の伝統的表現から逃れ出て、伝統の対立という和漢聯句の意言える」とされている。

の素材を用いて和臭を強めていくことで、和漢聯句とは異なる漢句の内容が同化する様が見て取れるのである。和漢俳諧が本朝に人名・地名)を漢文学が全面的に取り入れることによって和句詞)の調査では、俗言を用いるというよりは、和文学の素材(特本論文における和漢聯句と和漢俳諧によまれる素材(固有名

諧は、「唐ごころ」ではなく五言の「漢句という形式」を用いた「俳諧」としての独自性を確立したことが指摘できよう。和漢俳

紛れもない本朝の文芸として存在している。

達の詩囊をも明らかにするものと言えよう。 は潜の座を共有した貞門の俳人を始めとする、近世初期の知識人の漢籍の知識の一端が窺えたと考える。それは、後水尾院を中心の漢籍の知識の一端が窺えたと考える。それは、後水尾院を中心とした堂上連歌壇の共通の漢籍知識であると同時に、彼らと和漢とした堂上連歌壇の共通の漢籍知識であると同時に、彼らと和漢・共通していたはずであり、本論文において『後水尾院和漢千句』の固していたはずであり、本論文において『後水尾院和漢千句』の固していたはずである。

注

- 『連歌研究の展開』金子金治郎編、勉誠社、一九八五年八月)(1)「後水尾院の連歌活動について―江戸初期宮廷連歌の動向―」
- で、「大い」 古であったと考えられる。(赤松俊秀編『隔蓂記』第一巻、鹿苑 古であったと考えられる。(赤松俊秀編『隔蓂記』第一巻、鹿苑 の和漢三百・漢和百韻は和漢千句二日目の一日四百韻に備えた稽 数を増やしている。十一月の和漢二百・漢和百韻は和漢千句初日 数を増やしている。十一月の和漢二百・漢和百韻は和漢千句初日 大二年九月に二百韻、十一月に三百韻、十二月には四百韻と漸次 、寛永
-)『連歌総目録』(明治書院、一九九七年四月)による。
- めぐって―」(『連歌俳諧研究』七九号、一九九〇年三月)に「聯4) 深沢眞二氏は、「和漢聯句の俳諧的側面―『百物語』所引句を

- 句ならびに和漢聯句の漢句の作法は、詞は旧く故事来歴のあるも と述べる。 のを尊び、作意は新しく古人の句に拠らないことを宜しとする。」
- 5 八六年一月 深沢眞二「寛永期の和漢俳諧」(『連歌俳諧研究』七〇号、一九
- 6 前掲論文 (1)
- 7 とする和漢融合の新思想で、禅僧の間に流行した。(『国史大辞 「和」の学芸的世界を象徴する北野天神菅原道真が一夜参問した 当時の「漢」的世界を象徴する仏鑑禅師無準師範のもとに
- 8 96%(二五例の内の二四例)である。 名を一字で表わすのは、元来一字で表わされる堯・舜を除いて、 漢句に詠まれた人名は58~(五○○句の内の二九例)その内人

典』第十巻より、吉川弘文館、一九八九年九月)

- 9 こや(昆陽)、三輪の山、豊等(豊浦)、大江殿、くらぶの山 り2、難波がた1)、逢坂の関、金のみたけ(金峰山)、なかばし の高嶺(霊鷲山)、かた野のみの(交野御野)、難波3(難波わた 川)、葛城、ふじのたけ(富士山)、清瀧川、初瀬、宇治の山、鷲 小倉(小倉の山1、小倉の里1)、吉野川2、あすかの川(飛鳥 (中橋)、大原の里、小塩2 (小塩1、小塩山1)、生駒山、住吉、 和句に詠まれたその他の地名は以下の通りである。 すま(須磨)、嵯峨、小野、大井2(大井川1、大井の里1)、 (暗
- 10 (明治書院、一九九八年六月) 宮脇真彦氏執筆『日本古典文学大事典』九八一頁「俳諧」の項

部山)、明石がた

- 11 和漢聯句と和漢俳諧の比較が夙になされていることは先に述べた 前掲論文〈5〉)。 深沢眞二氏によって、押韻に用いられる韻字を手がかりにした
- 12 榎坂浩尚氏執筆「誹諧両吟集」の稿(『俳文学大辞典』角川書

- 漢千句』成立よりやや時代は下るが、伝本も多く、 店、一九九五年十月)によると、『俳諧両吟集』は、『後水尾院和 として利用された形跡があるといわれている。 詠み方の手本
- 13 桜楓社、一九七七年十一月)、深沢氏前掲論文(5) 歌俳諧研究』二号、一九五二年二月、後同氏『俳諧史論考』所収 尾形氏「和漢俳諧史考―匂付成立素因に関する一考察―」『連
- 14 1.%(四三六句(四百韻の追加二句を除く)の内、八例)
- 15 子』、岩波書店刊)による。 だになごり惜しきならひぞ」本文は日本古典文学大系『御伽草 『小敦盛』「あらむざんやな、生れてよりしてこの道は、さなき
- 16 房、一九七八年五月 ゥ「世話付古語」項、(加藤定彦編、初印本『毛吹草』ゆまに書 正保二年(一六四五)年成立、松江重頼編『毛吹草』巻二ノ42
- 17 同じく『毛吹草』巻二ノ42ゥ「世話付古語」項
- 18 院のすゞめは蒙求をさえつる。智者の辺のわらんべは。ならはぬ 影響も考慮に入れられよう。 経をよむとは。ようこそこれはつたえたれ」(大頭左兵衛本)の また、294 句から 295 句への連想には、幸若「富樫」の「勧学
- <u>19</u> みで「ハチ」と読ませたものであろう。 蜂は、「貶」、または「虫偏に萬」とも書かれるため、「萬」の
- 20 『古今和歌集』巻十五、恋 747、在原業平朝臣
- けるを、肥後の八代に年経て後…」とある。 小町谷照彦氏執筆『日本古典文学大事典』一〇三頁「歌枕」の 『俳諧両吟集』下「洛花今織錦」の巻の詞書に 「元南禅寺に有
- 前掲論文(5)

項(明治書院、一九九八年六月)

23

前掲論文(5)

本学大学院博士後期課程—

【表一】 固有名詞一覧表

		*	漢句	※ ─	左 位
	益人	658 · 482	極症E2		
		451 · 551	杜甫 2		
		393	杜牧ー		
		527			
		051			
		051	□ 世界		
		541	韓総コ		
		370 · 835	献 2		
		532 · 835			
		052			
		052			
桖		084	100000000000000000000000000000000000000		
	(紫栄)				
			10 (10 m)	7	
_,					
H.					
			17-10-0		
33.002.0.32					
iline ili	1251				
申託・沢绞				583	香原迪東
44-18		010		000	(北野天神)-※2
		298			(工工工工人)
NV F	の担	200	1m4 mm	067	飛鳥井君- ※2
.,	-	481	大蔵至1	301	IN met IN Ibe.
		S 1250			
					筑紫、涙川 他全%例
型		084	馬嵬坡二		※3
	海	· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	## (参加・ 156 (機・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	##	##

^{※1}半角数字は千句の通し番号

^{※2}網掛けは本朝の固有名詞

 $[\]Re m \rightarrow (\rightleftarrows)$

【表二】『俳諧両吟集』下巻・固有名詞一覧表

			*		*	左位
人 名	岔	詩人・歌人	402	白楽(天) —	317	人麿!
	(贈曲以言)	221	松子一	1		
	() () () ()	284	熊谷1			
		() () () ()	284	数 網一		
		() () () ()	291	後間1		2
		(源氏物語)	392	光源氏-	275	おきなまろし
		(狭衣物語)	393	狭衣!		
		(御曹子島渡)	415	午 若		
		(會我物語)	416	型工-		
世	岔		258	1 霍年一	022	在保姫!
张 茶	赘	10 4	042	本 张一	345	赤
		2	151	要染(明王)-		
			184	回羅漢-		
			222	一(米は) 世		4
W 6	も		025	返車1	111	伊勢曆二
			025	神泉 (苑) 1	155	奈良茶!
			200	南殿1		1-24
			294	趣 (孙熙)		
#III	竹		294	禁水ー		
型 必	岔		083	#∃-	092	志賀の唐崎1
			170	- 1	099	よし野川1
			175	那須野-1	110	やま田のはらっ
			185	羟 素一	117	小塩山1
			186	薩摩!	118	おほはら1
			231	郵 (素)	134 · 424	宇治り
			282	河内一	154	飛火野1
			289	駅 三一	163	むさし野1
			290	型 理 連 目 目 用 用 用 用 用 用 用 用 用 用 用 用 用 用 用 用 用	176	上 上 山
			324	10年十一	241	レヘンー
			333	八坂-1	250	藤の三
			334	浜園 -	257	有馬山-
			341	自擬嶌(おのころじま)1	268	あふ坂1
			342	鳴渡!	283	かたの1
			374	田林一	316	あかし1
					346	ひえのやまり
					351	つくばね1
					410	・一直楽

※半角数字は下巻所収句の通し番号

※網掛けは唐土の固有名詞